

「世界平和の祈り」とその正しい祈り方

2012年6月

「世界平和の祈り」は本来どのように祈るのが正しいのか？

「世界平和の祈り」とは次の五行の祈り言です。

世界人類が平和でありますように
日本（祖国）が平和でありますように
私達の天命が完うされますように
守護霊様 ありがとうございます
守護神様 ありがとうございます

世界人類の平和の中に自国の平和も家族の幸福も含まれているのですから、理屈の上では「世界人類が平和でありますように」という一つの祈り言で充分と言えますが、肉体を持った人間は、長い間蓄積した自己保存の本能から、どうしても肉体の自己を中心として守ろうと思ってしまう。自分の幸福や家族の幸福を願わない人はいません。また、愛国心を持たない人間もいません。よほどひねくれた人は別にして、他国よりも自国を愛しております。そうした感情を持っているために、「世界人類が平和でありますように」の一言だけでは満足できないものがあるのです。そうした理由から、世界人類の平和を祈るとともに自国の平和と自分達の天命の完うを祈る祈り言が加わっているのです。

五井先生のご指導の下で集団で祈った時には、守護の神霊に感謝する部分の祈り言が少し変化して、「～守護霊様、守護神様、五井先生、ありがとうございます」と信者さん達は祈りました。唯一会では現在、五井先生のお書きになった通りの表現で祈るようにしております。また、他の宗教団体の人と一緒に祈れるように個人名の入った「五井先生、ありがとうございます」という祈り言は省いており、それは各人の心の中で唱えていただくようにしております。

なお五井平和財団の場合には、宗教宗派を超えて活動する目的から世界人類の平和と各国の平和を祈ることに限定しました。「世界平和の祈り」を世界の合言葉にするためにはそうした方法も必要であると思います。他方唯一会は、「世界平和の祈り」を世界に広めるというよりも、五井先生の教義を忠実に継承するという目的に重点を置いており、「世界平和の祈り」の内容を一つも削除しておりません。また、現在の白光真宏会のように新たに祈り言や行法を付け加えてもおりません。五井先生の祈り言に何かを足したり、五井先生の祈り言から何かを削ったりしてはいないのです。五井先生が教えて下さった通りのオーソドックスの「世界平和の祈り」を私達は守り続けているのです。

もちろん個人で祈る場合にはどのように祈っても構いません。順序が逆になっても、どこから唱えても、一つだけを唱えても、繰り返し唱えても、それは各人のご自由です。たとえば「世界人類が平和でありますように」の一言だけを繰り返し唱えても構いませんし、守護霊、守護神の存在が理解で来たら、神様という一言にまとめてしまって、「神様ありがとうございます」とだけ感謝しても構いません。また、正しい祈り言であるならば、たとえば「世界平和の祈り」に「南無阿弥陀仏」や「南無妙法蓮華経」を加えても構いませんし、キリスト教の「主の祈り」を加えても構いません。但し集団で祈る場合には、個人の好きな祈り方を全てやっていたら日が暮れてしまいますから、「世界平和の祈り」に統一しております。なお、守護神は普通「しゅごしん」と読むことが多いのですが、五井先生の場合「しゅごじん」と読んでおりますので、私達もそれに倣っております。これは仏教的な読み方です。

質疑応答 1 : 「世界平和の祈り」と念仏

【ご質問-1】

「世界平和の祈り」と唱名念仏と同格と考えてよいのでしょうか。

【お答え-1】

「五井先生、五井先生」と呼んで神霊の五井先生に統一してゆく称名方法と「世界平和の祈り」はもちろん同格です。「世界人類が平和でありますように」と祈っている時、表面意識として意識はしていなくとも五井先生を呼んでいることになり、五井先生に感謝していることになるのです。また、浄土宗系のように「南無阿弥陀仏」という念仏も、これは「阿弥陀仏さまに帰一します」という意味なのですが、唱え続けておられますと、実在する阿弥陀仏の心に通じて阿弥陀仏と一体化してまいります。「世界平和の祈り」を中心にかみつど神集いした救世の大光明霊団の中には阿弥陀仏もおわしますから、阿弥陀仏の心と一体になれば「世界平和の祈り」と同じ心境になります。また、「イエス様、イエス様」とキリストを慕い呼び続けてゆけば、やはりイエスと一体化できます。ですから、個人の祈り方としてはどちらでもお好きな方法でおやりになればよいのです。自己が実際に阿弥陀仏と一体になり、イエスと一体になりますと、その瞬間に「世界平和の祈り」を広める天命を授かることになっているのです。

五井先生は「神様、ありがとうございます」という平易な一言の祈り言に想念を統一し、ついに神我一体化を成し遂げたのでありますが、その境地に到達しますと、新たに「世界人類が平和でありますように」という「世界平和の祈り」を広める天命を神から授けられたのです。現代においては、真実に神我一体になりますと、一人の例外もなく「世界平和の祈り」を祈り始めるようになるのです。それは、現代においては「世界平和の祈り」が最もふさわしい祈り言であり、釈尊もイエスも老子もその他の聖者も、神界の神々は皆「世界平和の祈り」を勧めているからです。

「世界平和の祈り」と念仏とは同じ原理であり、念仏も個人だけの救われに止まらないのですが、何と申しましても「南無阿弥陀仏」という表現が如何にも古く、鎌倉時代にはふさわしかった念仏も現代人の意識には段々と合わなくなってきました。よほど深い宗教縁がある若者以外には、「南無阿弥陀仏」を毎日唱えている若者は少なくなってきましたのではないかと思います。古い伝統があり、そのため多くの人々に信頼されてはいるのですが、日常生活の中で「南無阿弥陀仏」を常に唱えている人は、専門の僧侶か宗教心の深まったご老人くらいなものでしょう。昔は栄えた山村の寺が次第に廃れてゆくのは祈り言の古い時代表現も原因であるのです。

それに対して、「世界平和の祈り」は子どもにでも理解できる現代語で書かれており、個人人類同時成道の祈り言でありますから、世界と自己とのつながりが密接になり、世界平和を強く願うようになった現代にふさわしい祈り言と言えます。目的や内容は同じであっても、鎌倉時代の念仏よりも「世界平和の祈り」の方が現代人には理解しやすいのです。しかも「世界平和の祈り」は、その発音に把われずに世界中の各国の言語に翻訳できます。外国語の祈り言をそのまま唱えるよりも、自国の言語に翻訳して唱えることのできる祈り言の方が理解者が多くなり、その祈り言を唱える人が増えるのは当然です。

それでは、「世界平和の祈り」もまた五百年後には古い表現の祈り言になってしまうのでしょうか。それは否と言えます。現代の日本語は明治、大正、昭和、平成と少しずつ変遷しておりますが、昭和の時代に漢字とひらがな混じりの現代日本語の表記が確立し、言葉の乱れはあっても、今日まで基本的な日本語文法は殆ど変化してはおりません。五百年後の日本も、外国語の使用頻度は高くなるでしょうが、現在の日本語とほぼ同じ日本語を話しているはずですから、「世界人類が平和でありますように」という祈り言はいささかも時代遅れの表現とはなりません。「世界平和の祈り」は現代にふさわしい祈り言であるばかりでなく、遠い未来においても少しも古びたりせず、その輝きを失わないのです。

「世界平和の祈り」と念仏は、その原理や内容は同格とは言え、「世界平和の祈り」が鎌倉時代に現れても、世界との国交が殆どなかった時代のことですから、宝の持ち腐れとなって、その価値は発揮できなかったでしょうし、一方で科学の発達した現代において西方極楽浄土に住む阿弥陀仏の存在を説いても、素直に信じる人は少ないでしょう。現代においては現代の祈り言、「世界平和の祈り」が最もふさわしいのです。そうした時代背景を考慮すれば、今は「世界平和の祈り」は念仏とは同格ではなく念仏以上の祈り元であると言えます。「世界平和の祈り」は現代という時代に最も適した祈り言であるのです。

質疑応答 2 : 縦の光と横の光

【ご質問-2】

『宗教問答』の中で、「悟りを開いた人と凡夫の念仏では自ずとその効力は違いますよね？」という質問に、五井先生は、「その通り違う」ではなく、「誰が念仏をしようが効力は同じです。『世界平和の祈り』も、信仰の浅い深いに関係なく、その祈りの効力には

関係ありません」とお答えになられたくだけりがあったと思います。ですけど、これは観念論のような気がして仕方がないのです。信仰の浅い人の念仏や平和の祈りと、信仰生活や祈り体験の長い人の祈りとでは、やはりその深さ、効力面では格段の開きがあると思うのですが。森島先生の「平和の祈り」と私のような凡夫の祈りに差がないのはおかしいと思うのですが。同じだとするところに却って高慢な思いがあるのですが、いかがでしょうか。

【お答え-2】

確かに自力否定の他力易行道では、祈りによる成果、効果、利益は全て守護の神霊から与えられるものであり、自力で得るものは一つもありません。「世界平和の祈り」は五井先生と神界との約束事で、「世界平和の祈り」を祈る人のところに救世の大光明が必ず輝くのです。「法然上人の念仏も弟子の念仏も同じである」というのは、阿弥陀仏の救いの力は誰にも平等に働かれる、ということです。しかし、法然上人の心境と弟子の心境とは歴然とした差があります。太陽の光が燦々と輝く美しい青空も、厚い雲に覆われれば昼間にも拘らず暗闇となるように、その人の業想念の有無によって心境に差ができることはやむをえないことです。法然上人の心境は弟子よりも深いのは当然ですし、「世界平和の祈り」も始めて間もない初心者と数十年祈り続けている信仰者とでは心境に大きな開きがあるのは当然です。

「世界平和の祈り」を祈りますと、救世の大光明は誰の上にも平等に輝きます。五井先生が祈っても誰が祈っても全く平等に光り輝きます。天上から降り注ぐ大光明力を「効力」と言うならば、信仰の浅い深いに関係なく誰にも等しく祈りの効力はあると言えます。しかし、その大光明を縦に受けて横に放射する器を比較しますと、大光明を百パーセント横に放射している人はまだまだ少ないのです。それは、幽体に業想念が溜まっていて、その分だけ天上界から来た光明が妨げられるからです。

天上界から来た光明を幽体肉体という器を通して横に放射する光明力を「効力」と言うならば、人によって業想念の厚さが違うのですから、信仰の浅い人と信仰の長い人とは格段の差があります。つまり、天上界（神界）から来る縦の光は誰にも平等に照らされるのですから、その光を見れば「誰でも同じ」と言えますが、その光を受けて横（肉体界）に放射される光を見れば、その器の波動によって異なるのですから、「誰でも同じ」とは言えません。ですから、神の大光明を百パーセントに近いくらい肉体界に放射できるように自己の器の波動を高める必要があるのです。といて、「自力で波動を高めよ」と言っているわけではありません。『世界平和の祈り』を通して、守護の神霊に自己の想念を全て捧げ尽くせ」と言うのです。自己の欲望も願望も、「神様のみ心のままに為さしめ給え」と守護の神霊にお渡ししてしまうのです。小我の想いが全て浄められた時、微妙な波動になった器を通して救世の大光明は大きな輝きを放つことになるのです。神のみ心は限りなく奥深く、神の力は限りなく大きなものです。神の器となるように、あなたも「世界平和の祈り」を日々祈り続けて下さい。

質疑応答3：祈っていれば道は自ずと開かれる

【ご質問-3】

現在の白光真宏会の会長さんは天命を果たしていないのでしょうか。

【お答え-3】

昌美先生は天命を果たされています。五井先生ご帰神後十年間は、昌美先生も五井先生のみ教えを守り継承なさっていました。「五井先生のみ教えを継承する」という天命は、五井先生のご帰神後十年間は立派に果たされていたのです。昌美先生のこの期間の天命は、いわば第一の天命であったのです。ところが、1990年頃からだったと思いますが、「無限なる愛、無限なる叡知、無限なる歓喜…」等の「光明思想徹底行」が発表されてから昌美先生は生長の家の教えに傾倒してゆき、「人間神の子、完全円満、悪も病気も不幸も無し」という生長の家の教えを「我即神也」という表現に変え、生長の家の教えの「心の法則」を「想念の法則」と塗り替えて、さらに五井先生があれほど邪道と嫌っていた「念力による願望成就」も説くようになり、「五井先生の昔の教えはもう古い。今は『我即神也』と真理を宣言する時代なのだ」と、五井先生の教えを遠回しながらも否定するに至りました。

昌美先生を五井先生の後継者として信じてきた私にとって、この事実をどう解釈してよいのか、暫くは何も分からず茫然とするばかりでした。しかし、昌美先生が「光明思想徹底行」を発表された少し後に、幸いなことに私自身が「五井先生の真の光明思想」を理解できるようになったのです。そして、昌美先生と交代する形で私が五井先生のみ教えを説く天命を継承したのです。

それでは、昌美先生の現在の天命とは何でしょうか。それは、昌美先生ご自身は気がついてはいませんが、「試みのお役目」であり、これを昌美先生の第二の天命と私は考えております。「試みのお役目」とは、皆さんが五井先生のみ教えをどの程度理解しえたかを試みるお役目という意味です。悟りの前には、釈尊もイエスも守護神から様々な試みを受けています。五井先生もそうでした。人間が悟りに至る直前に守護神はテストをするのです。そのテストに合格して人間は真の悟りを得るのです。

では、どのように守護神はテストするのでしょうか。これは五井先生のご著書『天と地をつなぐ者』にありますように、守護神は「あなたは世界一の大菩薩だ」とその人の心境をおだてたかと思うと、「お前は使い物にならないから昇天させる」と脅したりと心を激しく揺さぶってくるのです。その時、守護神の言葉についてっかり乗ってしまうと失格してしまうのです。私達は神のみ心のままに動くように努力しているわけですが、霊視する神仏の姿が必ずしも真実の神仏とは限りません。「これは神の声だ」「私は宇宙神だ」「これは五井先生からのメッセージだ」と靈的に聞こえて来ても、その声が必ずしも真実の神仏の声とは限らないのです。

本心と業想念の区別がつかず、真実の神仏と幽界の生物の区別がつかない人、靈的に見

えるもの、靈的に聴こえて来るものは何でも神仏の姿や声と思い込んでしまう人は、尊厳性を持つ神の子とは言えません。神仏に素直に生きるということと業想念に妥協することとは違います。「教祖の言うことだから」と言って、どんな変な行為を命じられても従うとか、「宇宙神からの命令だから」と言って、善悪の判断もせずに行動に移すということでは、自由に生きる権能を持つ神の子とは言えません。

誰かに命令されて動くようでは神の子とは言えません。教祖の言葉にいちいち左右されているようでは神の子とは言えません。それが神仏の声であろうと、自分が納得しないのに動かされるままに動いているようでは神の子とは言えません。誰からの束縛もなく、自分が自由に動きながら、それでいて自然と神のみ心にもかなっているというのが神の子の生き方であるのです。そうした自由自在な神の子になるために守護神はテストをします。そのテストに合格する一番よい方法が「消えてゆく姿で世界平和の祈り」なのであります。実際には、守護神のテストにはこのように答えるのです。

守護神「光明の言葉を思念することが光明思想の行であるのだ」

正 答「はい、消えてゆく姿。世界人類が平和でありますように」

守護神「『世界平和の祈り』よりも、人類即神也の宣言行の方がよい方法であるぞ」

正 答「はい、消えてゆく姿。世界人類が平和でありますように」

守護神「如来印だけではだめだ。たくさんの印を教えてやろう」

正 答「はい、消えてゆく姿。世界人類が平和でありますように」

守護神「汝を神人にしてやろう」

正 答「はい、消えてゆく姿。世界人類が平和でありますように」

守護神「宇宙神が汝にご褒美を与える」

正 答「はい、消えてゆく姿。世界人類が平和でありますように」

昌美先生から何を言われても、このように全否定して「世界平和の祈り」を祈ればよいのです。真実でないものは「消えてゆく姿」と否定して「世界平和の祈り」を祈れば、それは自然に消えてしまい、行動に現れてくることはありません。ところが、白光真宏会会員の多くは、昌美先生の言葉を否定せず、善悪正誤の判断ができず、全て肯定してしまっているがために、いつまでも試みが続いているのです。神の声であろうと、宇宙神からのメッセージであろうと、五井先生のご神示であろうと、一度は全て「消えてゆく姿」として否定してしまわなくてはなりません。もし真実の神の声であり、五井先生の神示であれば、どんなに否定しても、それは行為となって現れてきますから、「神のみ心を無視してしまうのではないかと恐れることはありません。幽界の生物が、靈的な光明を見せたり、宇宙神の名を騙ったり、五井先生の姿をして現れることがあるのですから、どんな神示も「消えてゆく姿」として全否定してしまうことが必要なのです。そうした意味において、昌美先生は「試みのお役目」として皆さんを試みる天命を果たしているのですし、昌美先

生の試みの言葉に把われずに「消えてゆく姿で世界平和の祈り」を実行することが私達の天命であるのです。

【ご質問-4】

本人が結果的に果たせないような天命を神が授けることもあるのでしょうか。

【お答え-4】

本人が果たせないような天命を神が授けることはありません。業想念によって天命成就が遅れることはありますが、何生かけてでも、いつかは天命を完うさせて下さいます。「私達に授けられた天命は必ず完うされるのだ」と信じて何事にも真剣に取組み、努力してゆくことが大事です。

【ご質問-5】

今生での歩みがふしだら（努力不足等）なら、その天命（当初の生まれながらの天命）を取り去ってしまわれるのでしょうか。反対に努力如何によって（当初の）天命でないものまで任されることがあるのでしょうか。

【お答え-5】

その人が怠惰だからといって、神がその人の生まれながらの天命を取り去ることはありません。また、努力することによって天命が現れてくるのですが、どんなに努力しても天命以外の仕事をすることはできません。生長の家の教団を守る神霊が五井先生に移ったことを前にお話しましたが、それも神のご計画の一つであったのです。

【ご質問-6】

仕事、趣味でも、それが自分の天命であることを知るには、それをしている平安と喜びがあることが天命かなと思います。していて却って苦痛に感じることは天命ではないと思ったりします。共通してある天命は「世界平和の祈り」を祈ることになると思います。自分の天命をより深く分かるにはどのようにすればよいのでしょうか。

【お答え-6】

天命と言いましても、初めから「これが私の天命だ」と分かることは少なく、日常生活で努力しているうちに自然と現れてくるものです。また、天職というのは天から授けられた職業で、自己の能力に合った職業ですから、「仕事をしていて楽しい」と感じるものです。

「守護霊様、私の天職をお授け下さい」

と祈っていれば、守護霊が天職につけるように導いて下さいます。

「守護霊様、私の天命を教えてください」

と祈っていれば、守護霊が天命を自覚できるように導いて下さいます。

私が五井先生に初めてお会いした時、「私の天職は何でしょうか？」とお尋ねしましたら、「教職がいいね」と五井先生は教えて下さいました。「教職と言いますと、中学校か高校の教師になったらよいということでしょうか？」と私がさらにお尋ねしますと、「いや、何でもいいんだよ。…教える仕事が向いているんです」とお答え下さいました。五井先生はそれ以上は具体的に何もおっしゃいませんでした。五井先生から自分の天職を教えてくださいました私は、当初「中学校の数学の教師になろう」と大学の理学部数学科で勉強していたのですが、なぜか途中で頭がボーッとして思考力がなくなり、数学の勉強ができなくなりました。数学の試験問題では数字で答えねばなりません。「これではとても数学の教師にはなれない」とフランス語の勉強に転向して、大学で一番の成績を得たのですが、それも途中で飽きてしまい、「中学校か高校で教師になる」という目標は脆くも崩れさってしまいました。

その後は、熱中して稽古していた合気道が役に立って「合気道を教える」という職につき、「これこそ私の天職だ」と思っていたのですが、その合気道も物足りなくなり、30歳代で終わってしまいました。40歳になったものの、生きる充実感を失い、もう何もやる気がなくなったある日のこと、五井先生のご本を読んでいると、突然五井先生のみ教えがはっきりと判ってきたのです。20年間以上漠然としていたみ教えが私の頭の中できちんと整理され、「何もかも分かった」という気持ちになったのです。それから私は五井先生のみ教えを伝える覚悟を決めたのですが、五井先生から教えていただいた私の天職である教職とは、「五井先生のみ教えを伝える」という教職だったのです。18歳の時に教えていただいた天職のお答えが40歳の時にようやく具現化したわけです。ここまで来るまでは何と長い道のりだったことでしょうか。私のように天職が分かるまでには何年もかかる場合があるのです。

天命とは、天職と重なる部分もありますが、もっと幅の広いものです。天命と言うと、生涯に一つしかないように思われるかも知れませんが、日々私達は守護霊から天命が与えられており、日々私達は天命を完うするように導かれているのです。

私達に共通した最大の天命は「世界平和の祈り」を祈ることです。日々「世界平和の祈り」を祈っている人は、平凡な生活のように見えましても、日々神から授けられた天命を果たしている人と言えます。自分の天職も天命も分からない人は「世界平和の祈り」に専念することです。「世界平和の祈り」に専念していれば道は自ずと開けてまいります。

参考：唯一会が 2000 年祭に参加する理由

昌美先生の教えを批判している私が、昌美先生が会長である五井平和財団主催の「2000年祭」に参加したことを不思議に思われる人もいるかと思います。これは、昌美先生が五井平和財団では『世界平和の祈り』こそ究極の祈りである」と説きつつ、白光真宏会では「世界平和の祈り」と共に「我即神也の宣言こそ究極の祈りである」と説いていることに原因があるのです。つまり、昌美先生には矛盾した二面性があるのです。しかし、私は「昌美先生の教えの全てが間違いである」と申し立てるわけではありません。「世界平和の祈り」を伝えている昌美先生を批判してはおりません。白光真宏会で指導されている「世界平和の祈り」以外の行、すなわち「光明思想徹底行、非光明思想消滅行、我即神也・人類即神也の宣言行、想念の法則による願望成就行」について、私は声を大にして「五井先生の教えから外れている、間違っている」と批判しているのです。「世界平和の祈り」を説いている時の昌美先生は文句なく正しいのです。

なお、「白光の会員でもない者が白光の批判をする資格はない」と理事の富田さんが言ったので、私は白光の会員となっております。そして、五井平和財団の会員でもあります。私は白光の会員として白光を批判しているのです。それは「白光を潰そう」という目的ではなく、「本来の白光に戻してやりたい」という愛の心から発しているのです。私は敵意を持って悪口を言っているわけではありません。私の愛の心がなかなか理解されず、昌美先生反逆者の一人にされてしまうのを私は非常に哀しく思います。

現在の白光の行事には「世界平和の祈り」単独の集会在一つもありません。従って私のような者は、参加したくとも参加する場所がありません。幸い五井平和財団が設立され、「世界平和の祈り」という共通の祈り言を祈る場ができました。この五井平和財団の行事では昌美先生も「世界平和の祈り」以外の教えは説いておりません。それは、財団を管轄する文部省（当時）の指示により白光のような宗教行事は固く禁じられているからです。この五井平和財団での昌美先生のご活躍については私は賞賛を惜しみません。宗教宗派を超えて「世界平和の祈り」をすることには反対する理由はありません。大賛成です。唯一会は五井先生の教義を守り、「世界平和の祈り」を中心としておりますが、『世界平和の祈り』を祈る団体があれば自ら進んでその団体に入ってゆき、協力させていただきたいと思えます。主義主張が異なっても、同じ「世界平和の祈り」を祈っているならば同志ではありませんか。相手が自分に話しかけてくるのを待っているのは、いつまでたっても友人は作れません。私達の方から進んで相手に話しかけてゆき、下座に立ち、相手の心を開き、友人を作ってゆかなければなりません。「自分の方が正しく偉いものだから、相手から挨拶に来るべきだ」というような狭い量見では世界平和は作れません。

従って、唯一会としてこの度の五井平和財団の 2000 年祭に参加したのは、『世界平和の祈り』を共に祈る」という大目的の他に、「唯一会はあなた方の敵でもなければ反対者でもないのです。あなた方の味方であり、同志なんですよ」とアピールして皆さんの心を大きく開かせる目的もありました。心を小さく閉じていては駄目です。「世界平和の祈り」を合言葉に、私達地球人類は仲よく手を握らねばなりません。「世界平和の祈り」を共に祈る時、主義主張を超えて私達の心は一つに融け合うのです。